

(つづき) ~しかし反対に、不信仰な者のわざは、まったくの呪いであり、不真面目に働く者は、二倍の呪いを招くということも本当である。なぜなら、その心の思いは働きのなかにも神をあなどっており、神の戒めを犯し、隣人に対しては不正、盗み、着服することを考えているからである。そのような考えは、まさしく神と人に対する呪い以外の何であろうか。そのためにそのわざと仕事も、それによって彼ら自身を損なう二重の呪いとなるのである。こうした恒常的祈りについて、キリストはルカ福音書 11 章 9 節以下に、絶え間なく祈らなければならないと明らかに言われたのである。なぜなら、人は絶え間なく罪と不正に対して自らを守らなくてはならないからである。それは人が神を畏れず、その戒めを目の前に保っていないところでは生じようがない。詩 1 篇 2 節に「神の戒めを昼も夜も思っている人は幸いである」と言っている通りである。しかもわれわれは、正しい祈りから遠ざからないように、ついには自分の仕事の方が必要だなどと考えないように注意しなくてはならない。自分の仕事は決してそんなに大事なものではありません。そして、そのような仕方ではわたしたちはついに祈ることをなまけ、怠惰となり、冷淡になり、不精になるのである。というのは、悪魔はわたしたちに対して、決してなまけても怠惰にもなっていないからである。ちょうどそれと同じように、わたしたちの肉は、罪に対してなら、いつもまことに生き生きと活発であるが、祈りの精神に対しては快く思わないものだからである。

さて、心がこのような倦むことのない語りかけによって熱くなり、落ち着いてきた時、手を組んで膝まづくか、立ち上がるかし、目を天に向け、声に出すか、あるいは心の中で、できるだけ簡潔に言いなさい。

「ああ、天の父、愛する神よ、わたしは価値のない、哀れな罪びとです。わたしの目や手を、あなたに向かって上げ、祈るべき価値もありません。しかし、あなたは、わたしたち全ての者に祈るように命じ、またそれを聞き届けることを約束なさいました。そのうえ、わたしたちに、あなたの愛したもう御子、わたしたちの主イエス・キリストによって、言うべき衣、その方法をも教えてくださいました。ですから、わたしはあなたの命じたもうままに、従順に御前に出て、あなたの恵み深いお約束に身をゆだねます。そして、わたしの主イエス・キリストの御名によって、地上にあるあなたの聖なる全てのキリスト者たちと共に、主がわたしに教えてくださったように祈ります。(以下、「主の祈り」が続く)

---

【解説】床屋の親方に教えた「簡単な祈りの仕方」(後篇)です。先週のそれは祈りへの招きと信仰者の祈りの業を解説、今週のそれは不信仰な者の行末を描写しています。この構成はルター自身があげているように、詩 1 篇の「いかに幸いなことか~主の教えを愛し、その教えを昼も夜も口ずさむ人。~神に逆らう者はそうではない。~」を受けています。

ルターはユーモアのある人だったと思います。洗礼は、水をくぐることによって罪びとであるわたしを「葬り」「清め」、「新生」させる儀式ですが、ルターは、わたしたちの罪は泳ぎがうまい、と言っています。上記の文章も、わたしたちの「肉の弱さ」を見すえた上で、祈りの恵みと、そこに赴くことの富を教えているのです。さて、ルカ 11 : 9 は？